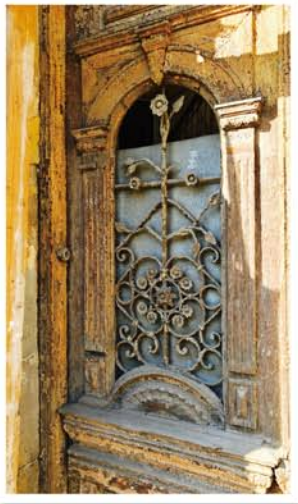


ジョージア (グルジア) 便り その35

『新緑の中、アスレティという小さな村へ行く』

文 高野陽年 text by Yonen Takano



トビリシの歴史を感じさせる玄関

イースター中の「重い木曜日」「赤い金曜日」と言われる日々は天気が崩れやすく、今年も強風雨に見舞われていた。それはキリストの受難を表し、彼と共に苦難を乗り越えようと絶食をもって生活を慎み、亡くなった人々を偲ぶジョージアの人々の心を体現しているかのようなのである。どんよりとした空気が街を漂っているのだ。

しかし復活祭が過ぎる頃、様相はガラリと変わる。新緑が芽吹き出し、太陽も強く輝き出す。突然のように街に緑があふれるのだ。爽やかな青空と新鮮な緑をまとった街は別物のようだ。建物の剥がれた塗装や、崩れかけたレンガ、垂直感覚を忘れた柱、平行四辺形に潰れた玄関などいつもは僕を憂鬱にさせるものも、新緑のもと、ユニークで愛おしい存在へと生まれ変わった。トビリシは様々な為政者が街を作って

きたせいか、ムーア調からゴシックまでデザインに富んだ街並みがある。

友人がさらに面白いものがあると言うので僕は郊外に向かった。見渡す景色は、中心街の崩れかかっているとはいえ美しいデザインの建物とは打って変わり、どちらかといえば無機質なツビエト式の建物が目立った。そんな中、

アスレティという山間の小さな村は、明らかに近隣の村とは違った出で立ちで、僕は一瞬目を疑った。軒先にはブドウの木が垂れ下がり、石窯で焼くパンの匂いは変わらない。そこに住むジョージア人も人懐っこそうだ。しかし彼らの住みどころが独特であったのだ。どこかドイツの田舎を思い浮かべる。しかもトビリシにあるドイツ風ゴシック建築とは異なるもので、ビールと乾草が似合うグリム童話の世界から飛び出してきたようだ。かなり古い建物のようで漆喰などは剥がれているのだが建物の根幹はしっかりしている。なんでもドイツ人が200年前近くに建てた街並みらしい。

なぜこんな田舎にドイツ人が街を作ったのか。彼らは帝政ロシアの積極的移民政策により移り住んできた、ロシアのヴォルガ地方に代表されるよう

なドイツ移民であった。彼らはドイツ式の農耕をし、ジョージアのインフラに多大な貢献をしたと言われているが、ソ連に時代が下り、スターリンの国内政策によりほとんどのドイツ人がカザフスタンや中央アジアに強制送還になり、このアスレティでもドイツ人は街を捨てざるを得なかった。

崩れかけた建物は時代の流れとともに朽ちて、色あせてしまったが、春の息吹は瓦礫にでさえ輝きを与え、僕らにそこにあった喜びや苦難の歴史を訴えかけているようだ。

想像力を働かせ200年前のアスレティやトビリシを思い描く。そこには今よりも色彩豊かな街がある。カラフルな建物、様々な人種。それぞれが春を楽しんでいるようだ。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

